

アケビ *Akebia quinata* (Houtt.) Decne.

アケビ科 *Lardizabalaceae*

1. 利用可能部位：地表茎（蔓）および空中茎の先端の長く伸びた当年枝。

2. 組織形態：

茎（蔓）の横断面はやや角張った丸～丸形で、20本程度の一次維管束が同心円状に並ぶ（A）。表皮は薄く、クチクラも薄い（D）。下表皮は特に発達することはない（D）。皮層の内側には丸い一次維管束の外形に沿ってアーチ状の繊維組織がある（A、C）。維管束は丸形で上半分（背軸側）は一次篩部、下半分が一次木部で、多数の原生木部～後生木部の道管がある（C）。蔓が伸び止まるとともに形成層が活動を開始し二次組織を作り始める。形成層は継続して数年間活動するが形成される二次木部の量は多くはない（B、E）。形成層の活動による肥大成長により、周皮が形成され、表皮は剥がれて行く（B）。また、維管束外側の繊維組織のアーチ状構造は分断され、新たに不定形の形の厚壁組織が作られる（E）。

3. 利用例：編みカゴなど多数ある。

4. 遺跡出土遺物：

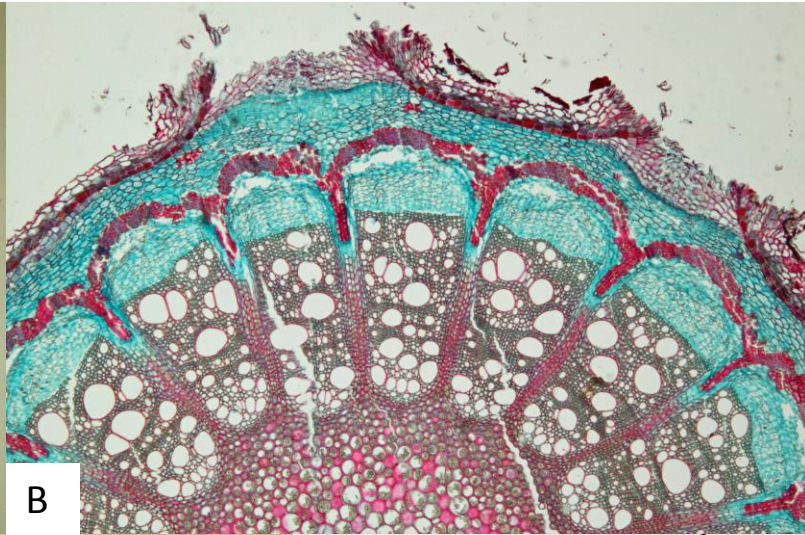
（工事中）

図説明

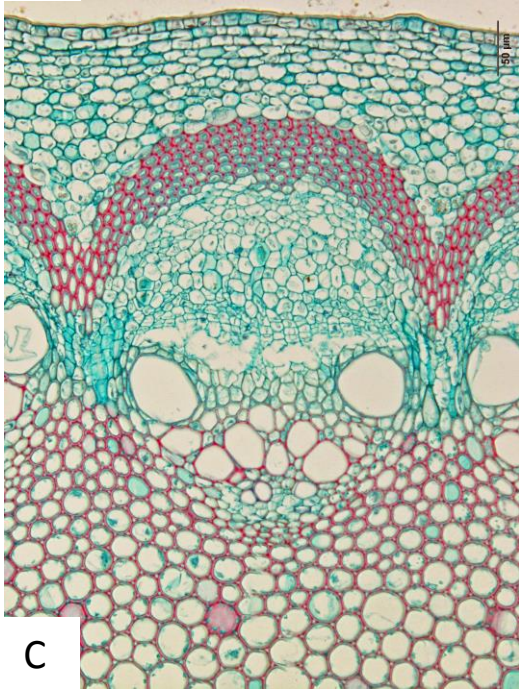
A:形成層が分化したばかりの当年枝。外形はやや角張った円形。一輪の同心円状に並んだ一次維管束は20本ある。B:2年生の茎。二次木部の蓄積により直径が増大、表皮ははげ落ち、周皮が形成されている。図の上と右に皮目の断面が見える。C:当年枝の拡大。丸い維管束の外側にアーチ状の繊維組織がある。一次木部は原生木部～後生木部で10本程度の道管がある。形成層は分化しているが二次木部の形成は未だ無い。D:当年枝の表皮、皮層の拡大。表皮は1細胞層で、クチクラは薄い。表皮下の下表皮、その下側の柔組織は特別な構造はしていない。E:2年生の茎の拡大。はげ落ちかけているクチクラ、周皮のコルク層、コルク皮層が見える。分断されたアーチの間には厚壁組織が分化してアーチを繋いでいる。



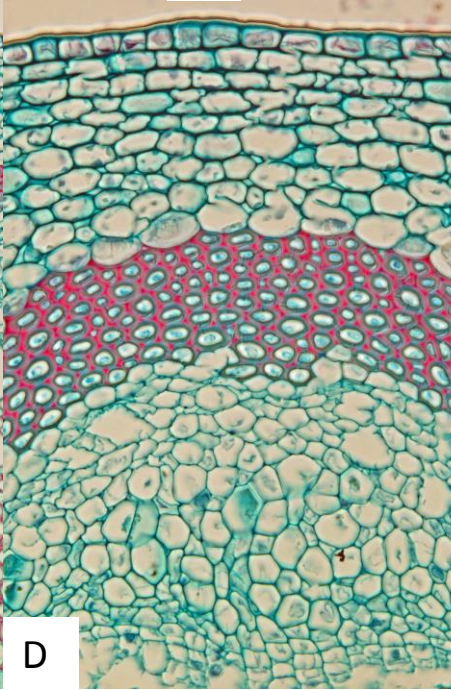
A



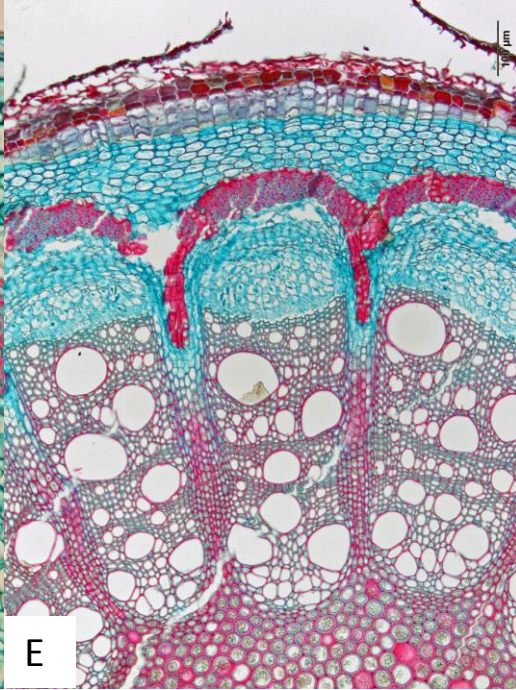
B



C



D



E